

序説

ある和算研究者の足あと

1. 調査

終戦から八年たった、昭和二十八年八月五日。夏の盛りのことである。

大分県・国東（くにさき）半島の「香々地（かかじ）」というバス停車場に降り立った三人の人物がいた。あたりは一面の夏の緑が広がっている。ここには太平洋戦争も、終戦の玉音放送も、朝鮮動乱もなかった。何百年もの間、変わる事のない真夏の日本の景色が広がっていた。

一人は大学教授。一人は二十歳前の学生。もう一人は——四十九才の小学校の校長であった。そろばんが得意な教育者であった。名を長谷九郎という。

長谷は、日露戦争の年、明治三十七年四月二十八日、大分県・西（にし）国東（くにさき）郡朝田村（現在の太田村）に生まれた。

大正年間、長谷は、大分県師範学校に入学している¹。

小学校の教員つまり訓導の資格を得るためである。

当時の師範学校は、学費が不要であった。進学のある若者のなかで、家が裕福な者は、尋常小学校を終えると、すぐに旧制中学に進んだ。長谷が旧制中学に進学せずに、教育者の道をこころざしたのは、あるいは、家庭の事情があったかもしれない。

大正十四年、師範学校を卒業。長谷は、大分市の尋常高等小学校の訓導になった。

長谷の青春は、学舎（まなびや）の幼い子供たちとともにあった。

戦前の長谷には、東京の文部省を相手に、勝利の凱歌をあげた痛快な思い出がある。

長谷は、昭和十一年三月から、十五回、数百項目に及ぶ建議書を、ときの文部大臣に提出している。多くは、昭和三年発行の小倉金之助訳「カジヨリ初等数学史」を独力で解析し、筆算や暗算、珠算の計算法の改善を訴えるものだった。

その一つに、四つ玉そろばんの採用がある。

¹ 明治 44 年 4 月西国東郡波多方尋常高等小学校尋常科に入学。大正 8 年 4 月同校高等科第二学年卒業。同年「私立習説校」入学。大正 9 年から一年間母校の准訓導。大正 10 年 4 月 5 日に大分県師範学校本科第一部に入学した。

それまで商人たちが愛用していた、梁下五珠の一番下の玉は飾り玉で、計算上、絶対的に必要な玉とは、長谷にはどうしても思えなかった。十を入れるとき、五番目の玉をはじき、更に上位の一粒をはじくのは、無駄な重複に思え、我慢がならなかった。九のあとの十は、すぐに上位に移ればよい、長谷はそう考えた。

四つ玉そろばん自体は、長谷の考案ではない。古く天明年間に和算家・乳井貢²がその著「初学算法」のなかで「下の玉四にすべし」と述べたとされる。明治二十六年には、竹貫登代多（登代太）や西川秀二郎が、四つ玉そろばんを唱導している。

長谷は、大分からはるばる東京まで足を運んだ。「数字は十進法だから、下の玉は五つでよい」などと主張する反対意見もあったが、計算の速度では、明らかに四つ玉そろばんのほうが優れている。長谷は、文部省の役人の目の前で、それを実証して見せた。

熱意は、昭和十四年に実を結んだ。文部省は、小学校の計算器具として「四つ玉そろばん」の採用を決定した。この四つ玉そろばんのほか、数百項にのぼる長谷の建議³のうち、文部省がそのまま採択したものは、百余項になる。

昭和十四年、長谷三十五才。教壇に立つ小学校では、子供たちから「そろばん先生」とあだ名で呼ばれ、慕われていた。文部大臣への建議は、いわば血気さかんな青年教育者としての思い出であった。

三人が香々地のバス停車場に降り立った時刻は、正午前だった。

この八月五日には、学校教育法の改正が公布されている。小中高の教科書の検定権を、文部大臣が握る、という法律である。子供たち自らが筆をとって教科書を黒く塗りつぶしていったスミ塗りから八年。終戦直後の極端な「民主化教育」はこの日をもって終わる。吉田茂内閣のもとで、いわゆる戦前への逆戻り、「反動教育」と呼ばれる時代が幕を開ける。戦後の教育界、とくに歴史教育を揺るがせた「教科書検定」は、じつにこの日から始まるわけであるが、バスを降り立った三人には、もちろん、こののち到来する教育の嵐を占うすべはない。

長谷は、二ヶ月前、不思議な記事が郷土史にあることに気づいた。

西（にし）国東（くにさき）郡役所が大正十二年に編集発行している「大分県西国東郡誌」。

そこには、江戸時代の数学者・吉田光由（みつよし）の墓が、西国東郡内の三重村の夷（えびす＝現在の大分県西国東郡香々地町夷）にある、と記されていた。

長谷は、吉田光由が「塵劫記（じんこうき）」という江戸時代にベストセラーとなった、そろばんと数学の本の著者であることを知っていた。また、安南（いまのベトナム）と朱印貿易をしたり、大堰川、富士川、天竜川、高瀬川の土木工事をした、有名な京都の角倉了以（すみのくら・りょうい）の一族であることも知っていた。光由は、熊本藩の細川家

² 弘前の人。林鶴一「和算研究集録・下」の「仙臺、一ノ關、盛岡及弘前藩ノ和算家ニ就テ」を参照。

³ 長谷は、教科書中の緯度の定義の誤謬も指摘している。

に数学をもって仕えたとも言われていた。

西国東郡誌の記事は、次のような内容であった。

「吉田光由は細川忠興につかえ、熊本に住んだあと、夷に来て、隈井吉定のもとに身を寄せた。隈井吉定は光由を優遇し、村民の子弟に数学を教える便宜を図った。数年後、京都から光由を慕って渡辺藤兵衛という人物が夷に来た。光由が寛文十二年十一月に亡くなったあと、藤兵衛は師の衣鉢を継ぎ、数学の教授を行った。藤兵衛は、宝永四年十二月、夷の地で世を去った。光由の住まいを稽古庵といい、今でも残っている。吉田光由と渡辺藤兵衛の、二人の墓は、夷にある。光由の墓には「頭機円哲居士」「寛文十二年十一月〇〇日卒」「引導師両子寺順慶法印」と刻まれ、藤兵衛の墓に刻まれているのは、「即頓休円大徳」「宝永四年十二月〇〇日卒享年七十三」「山城国大仏二丁目渡辺藤兵衛号休円」である。」

昭和二十八年六月初め、長谷は、西国東郡誌の記事を何度も読み返した。

若き長谷が研究を重ねた「カジヨリ初等数学史」の訳者・小倉金之助は、「われ関孝和を恐れず、吉田光由を恐る」と述べている。小倉金之助は、長谷が四つ玉そろばんの採用を訴えた翌年の昭和十五年には、岩波新書「日本の数学」を出版している。長谷の知る、和算研究の第一人者であった。われ関孝和を恐れず、吉田光由を恐る。小倉金之助の言葉は、そろばんや数学の大衆化を行った吉田光由への賛嘆の言葉だと感じていた。

その高名な吉田光由の墓が、角倉家ゆかりの京都ではなく、郷土の西国東郡にある。

なぜだろう、という疑問が長谷にわきおこった。実地調査をしなければならない、という思いが胸を駆けめぐった。すぐさま、小倉金之助に手紙を書いた。

六十八才の小倉金之助からは、温かい励ましの返事が返ってきた。

長谷は、小倉金之助をはじめ、その頃、新進の和算史研究者と言われていた平山諦、大矢真一の二人、京都市観光課、熊本市役所などにも連絡をとっている。郡誌に吉田光由の引導師として記されている両子寺（ふたごじ）へは、住職の寺田豪延に、順慶法印について問い合わせた。

六月二十二日。寺田豪延から回答があった。順慶法印は延宝七年己未八月七日遷化（せんげ）。両子寺四十七世。明治五年の大火で古文書は焼失した旨、記してあった。

長谷は、日本史の年表を繰り、郡誌に記載されている光由が亡くなった寛文十二年が西暦1672年であり、順慶法印の延宝七年が1679年であることを確かめた。順慶法印は吉田光由より七年後に遷化している。そこに大きな矛盾はなかった。

長谷は、三重村役場にも問い合わせている（*追記2を参照）。驚いたことに、「吉田光由の位牌」が隈井家にあるという。郡誌に記載されている、吉田光由の保護者であり、稽古庵の建設者である隈井吉定の子孫が、残っていたのである。「位牌」について、郡誌はまったく触れていなかった。長谷は、位牌の現物を見たいものと思った。

七月六日午後四時。長谷は、大分市船頭町の久多羅木儀一郎の自宅を訪問した。

久多羅木は、昭和十一年の「臼杵史談」第十八、十九、二十号に「臼杵藩民政機構の研

究」という題名の論文を発表している。大分県の郷土史研究者として、その名を知られていた。

長谷は久多羅木の家の一室で、矢つぎばやに質問した。

「国東の生んだ三浦梅園や麻田剛立の数学は、誰から継承したのですか」「三浦梅園の祖父・徹山には数学書の著作があるのを、ご存じですか」「西国東郡誌に吉田光由の墓があると書いてあるのを、ご存じですか」「吉田光由という人を知っていますか」「塵劫記という和算書が、江戸時代に売れに売れたのをご存じですか」

質問の順序が、難解なことから容易と思われる内容に変化したのは、久多羅木に知識がなかったためである。久多羅木は、知らない、知らない、と繰り返した。長谷が、「三浦梅園の祖父の三浦徹山、麻田剛立の祖父の綾部道弘、両子寺の順慶法印、数学者の吉田光由はみな同時代の人です」と述べると、久多羅木は、そうですか、という程度であった。交遊関係があったのでしょうか、としか言わなかった。

「光由が夷に来た、と郡誌に書かれているのは細川公の領地であったからではないでしょうか」。長谷が水を向けると、久多羅木は、その頃は城代家老が杵築にいた⁴ことを教えてくれた。

長谷が辞去するとき、久多羅木はこう述べた。折角おいでいただいたが、数学史の関係はよく分からないので、ご参考になることが一つもなかったのは遺憾です。長谷は、「古文書などは不案内なので、これからよろしくご指導を願います」と儀礼的に挨拶して、久多羅木の家を出た。

長谷は、師範学校の時代に、郷土の偉人、三浦梅園の「梅園全集」を愛読していた（*追記2を参照）。梅園は、その著作のなかで「疑い怪しむべきは変にあらずして、常の事なり（異常現象ではなく尋常の現象をこそ疑いをさしはさみ解明すべきである）」と述べている。反復が可能な普遍性のあるものこそ、自然科学の対象になる。長谷には、数という抽象概念を取りあつかう珠算や数学こそ、梅園の語る普遍性の極致であるように思えた。

三浦梅園は孤高の人であった。唯一の親友が、数学者・麻田剛立であった。国東を脱藩し、大坂に移り住んだ麻田剛立と三浦梅園との手紙も残っている。ちなみに麻田剛立は、伊能忠敬の師である高橋至時や間重富の師匠に当たる。三浦梅園の弟子筋には、数学者・帆足万里がいる。

梅園の祖父・三浦徹山は「算書二巻」を著している⁵。この三浦徹山や、剛立の祖父・綾部道弘と吉田光由や渡辺藤兵衛とは関係がありそうである。長谷は郡誌の記事を発見したときから、こう思っていた。

長谷が校長を勤める小学校は、夏休みに入った。

七月三十日。長谷は、吉田光由の墓の調査日を、八月五日に定めた。三重村の鬼丸村長、

⁴ 木付（杵築）には「松井康之」が配された。（全国藩史資料）

⁵ 梅園全集・下、928頁。

位牌所有者で元村長の隈井吉孝、小学校校長から村長になり郷土史家でもあった猪股弥織、三重小学校の校長の宇都宮円学、同じく三重小学校の隈井辰子、香々地小学校長の松本友男に、実地調査に参加してくれるよう依頼状を郵送した。

このとき、長谷は、立会人に頼んでいた大分大学教授・和田芳雄には、出張先である大分県内の四日市と、別府の自宅に、同文の二通の葉書を出している。長谷は、小学校教員になったあと、師範学校の専攻科に再入学し、そののち、大分女子師範学校すなわち現在の大分大学に昭和四年秋から昭和八年春まで、三年半、勤務したことがある。数学を専門とする和田教授とは、大分女子師範勤務時代の縁があった。

昭和二十八年八月五日の正午前、香々地のバス停車場に降り立った三人とは——ひとりは豊後高田で待ち合わせた立会人の和田教授。ひとりはその日、長谷が助手として頼んだ、東大一年生の長男の嘉臣。初めての夏休みを利用して、嘉臣は大田村に帰省していた。そして最後の一人が、下調べを重ね、周到に実地調査の準備を重ねた、四十九才の小学校長・長谷九郎である。

この朝、七時四十八分に、長谷父子は、中山香（なかやまが）駅から日豊線の蒸気機関車に乗った。宇佐駅で参宮線（現在は廃線）に乗換えた。父子は、丸いコブのように突き出た国東半島のつけ根を、大田村から豊後高田まで、列車に揺れながら北に縦断した。十時すぎ、豊後高田で和田教授を出迎えた。十時五十分、三人は伊美行きのバスに乗った。豊後高田から香々地までは、国東半島を海岸沿いに時計回りに一時間ほど回るバスの旅であった。

三人を降ろすと、バスは、真夏の緑のなかを土煙をあげながら走り去った。

長谷は、まず八幡宮社司の進藤正臣を訪問している。（進藤との対話の内容は、記録に残っていない）

ついで、三重村の鬼丸村長が来るはずの香々地町役場に向かった。

ひなびた風情の香々地町役場に、鬼丸村長はまだ来ていなかった。（この日、鬼丸村長とは遂に面接の機なし、と長谷はのちに記している）

三人は、香々地町役場で助役の隈井永行と合流した。

近くの飲食店で、簡単に昼食をすませたあと、いよいよ三重村へ出発となった。

手荷物は、収入役の自転車で運んだ。香々地町役場から三重村役場まで、長谷たちは歩いた。丸い国東半島の中心部に向かう、徒歩の旅であった。

途中、病臥している郷土史家・元小学校長の猪股弥織の家を訪ねた。猪股は「西国東郡誌」をもとに昭和四年に「三重郷土誌」を書いている。起き上がった猪股に、長谷は訊ねた。

「郡誌に書かれている吉田光由の墓はどこにあるのですか？」

「どこにあるのか、ないのか、はっきりとしない」

「郡誌には、墓碑銘まではっきりと書いてあるではないですか？」

「郡誌も、私の三重郷土誌も、実は、実地調査をして書いたのではない。大正十二年の郡誌を書いた佐藤蔵太郎という人は、酒をよく飲む人で、興にのって書いたかもしれない。郡誌の出た当初から、光由の墓の所在は問題になった。昭和四年に私が三重郷土誌を書いたときも、よく分からないままだった」

猪股宅から、また歩く。

山ふところに抱かれた三重村役場には、依頼状を出した大勢の人々が待っていた。

長谷たちを困んだのは、多くは老人たちであった。六所神社宮司・板井清直、隈井辰子の父・仲専十郎、元教員の板井穀市などである。板井穀市は、三十一年前の大正十一年、郡誌の著者、佐藤蔵太郎がこの三重村を訪問したときに応じた一人であった。村書記の吉武欣也だけが、老人たちの後ろから若々しい顔をのぞかせていた。(吉武欣也は、三十七年後の平成二年の調査⁶の案内人となった)

ここで、長谷は、墓や位牌、稽古庵についての知識を得る。

光由の墓は、夷の「でーがはし」にある。でーがはしは台林と書く、という。

大勢とともに、三重村の夷の台林まで、山を登る。

墓地は、夷谷を見下ろす高台にあった。数十基の墓が、山あいの、まばらな集落を見おろしていた。美しい日本の夏の景色が、ここにも広がっていた。ふと、長谷は「すこぶる景勝の地」という言葉を思いついた。

吉田光由の墓は、墓地のほぼ中央にあった。

吉田光由の墓、正確には吉田光由の墓と地元で呼ばれている墓は——無銘であった。長谷は、なんども墓を手でさすり、墓碑銘の痕跡がないか確かめた。のちに、「作為による無銘碑」と長谷は記している。墓には、穂石にも台石にも、一つの文字も、紋章も、刻まれていなかった。この国東地方で、切り石の穂石を建て、しかも戒名を記す長方形の凹陷部まで中央に切り込みながら、無銘のものは、見たことがなかった。長谷が、このような白墓を見るのは初めてだった。

ただ、その無銘墓から一段下がった右手前に、ペン先のような同じ墓形の、ひとまわり小さな、もう一つの墓があった。「即頓休圓大徳」と正面に刻まれていた。その上に梵字のような文字がある。長谷には、この梵字が読めなかった。

右に回ると、側面には「宝永四丁亥天 十二月廿六日」と二行に分けて刻んである。「年」の代わりに「天」の文字が使われていた。(丁亥は「ていがい」又は「ひのと・い」。六十年を一周期とする干支(かんし)の一つ)

左側には「洛陽吉田七兵衛尉光由末弟 俗名渡辺藤兵衛尉某」の二行があった。(洛陽とは、京都のこと。尉(じょう)は老翁の意。某は「ぼう」又は「なにがし」)

藤兵衛の墓の文字は、はっきりと読めた。宝永四年は、西暦では1707年になる。この年、昭和二十八年から、二百五十年ほど前の墓である。

⁶ 近畿数学史学会の山田悦郎の依頼により、香々地文化財調査委員長の三角寛市らがおこなった。

同行の人のなかから、「末弟というのは、他人が書くものではない」と意見が出た。自分自身で謙遜して、私は吉田光由先生の末弟です、と言うもの、との意見である。もしかすると、この墓は渡辺藤兵衛自身が建立した墓かもしれない。二つの墓は、どうみても同年代である。藤兵衛は、自分の墓と無銘墓を建てたのかもしれない。長谷は、そう思った。生前墓は寿陵と呼ばれる。寿陵の建立を、逆修という。藤兵衛は、何かの理由があって、自らの墓を逆修し、無銘墓を建立したのかもしれない。正面の戒名や、左側面の「光由末弟」は渡辺藤兵衛が生前、そのように刻んでくれるよう、村人に頼んだのかもしれない。右側面の没年月日は、むろん、藤兵衛が亡くなってから刻んだに違いない。

藤兵衛の墓が分明であるのに、師の墓に、しかも大数学者の墓に、銘がないとは不思議なことだ、と長谷は思った。

同行者の一人、八十翁の鬼丸久一郎が、思い出したように、長谷に語った。

「隈井（くまい）のお庄屋のご隠居は、三十年ぐらい前に亡くなったが、それまでは、盆正月にはきつと羽織袴で稽古庵先生の墓参りをしておった」

隈井家は、この夷村一帯を代々おさめた旧家である。

菱形を縦に長く伸ばした、ペン先のような形をした二つの墓は、そろって東を向いていた。

嘉臣に手伝わせて、長谷は、二つの墓を採寸した。和田教授は、静かにそれを見守っていた。長谷は、黙々とノートに数字を書きつけた。

二つの墓の調査を終えた一行は、高台を下りた。

このあと、現地調査の一行は、稽古庵の旧地を訪れている。この夷で吉田光由や渡辺藤兵衛が村民の子弟にそろばんや数学を教授した、と郡誌に記載されている伝説の地である。

しばらく行くと、確かに庵を結ぶのにはふさわしい平地があった。一畝歩ほどだろうか。中央がやや高く平らになっている。稽古庵の昇降石段はずでに取り除かれていた。

そこには、一基だけの仁王像をしたがえた、ひときわ大きな一石一字塔が残っていた。一石一字塔とは、その昔、一つの石に、仏典のなかから一つの文字を刻んで、埋めたことに由来するそうなのと老人の一人が、わけ知り顔に長谷に語った。

周囲は、豆畑となっていた。

何十年か前までには、東向きの八枚敷ぐらいの堂があった、と同行者の一人が言った。あれは普通の堂作りだから、塾には使えそうもない、という声があがった。いずれ、建て替えられたのだろう。

付近には小川の流れる気持ちよい場所があった。

近くに谷口という集落がある。溪に入りにあるので、稽古庵は溪口庵とも書く、とのことであった。

「隈井の隠居で、ここに隠棲したものもいます」

調査団長の長谷に敬意をあらわして、当主の隈井吉孝が教えてくれた。

隈井家は、先に述べたように旧家で、古く隈井吉定の子孫である。この地は、細川氏の所領になったことがあり、隈井家は、細川氏独自の「手永（てなが）」と呼ばれる豪族であった。

日本歴史地理用語辞典（藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利建亮編・柏書房・昭和五十六年）をそのまま引用してみる。

「てなが 手永 熊本藩で行われた郷村支配の中間組織。一郡が一手永になっている場合もあれば、一郡が十手永に分割されている場合もある。手永の規模は、最大のもので矢部手永の七十三か村、最小のものでは高森手永の十二か村、平均二十～三十か村からなる。手永の役所を会所といい、惣庄屋が統轄した。惣庄屋はかつての肥後地方の土着豪族から選ばれ、一般に二十～三十石の知行が与えられたが、なかには百五十石の知行が与えられた者もある。惣庄屋は元来土地との結びつきが強かったが、のちには他手永に転任させられ、土地との結びつきが弱められた。手永の数は、初期には六十一、後期には五十二であった。」（西村睦男）

この夷の地は、慶長五年（1600）二月に細川忠興の所領となった。元和（げんな）五年（1619）十二月、忠興は忠利に家督を譲る。こののち寛永九年（1632）十月、細川忠利が熊本に入城するまで、1600年から1632年までの三十三年間、細川氏の所領であった。

歴史地理用語辞典は、肥後地方と断っている。おもに熊本での手永制度について述べている。隈井吉定の時代は、細川氏の豊後支配の頃である。

「光由の位牌をご覧くださいか？」

手永、隈井家の当主、隈井吉孝の家には、吉田光由の位牌を残していた。

この日、長谷は、稽古庵の跡地を見たあと、隈井家を訪れ、位牌の文字も写している。

位牌は、名刺を縦に伸ばした、小さな短冊のような形をしていた。

箱位牌とか千枚位牌とか言われる形式のものだった。

隈井家に残る多くの位牌のなかの、薄い一枚の杉板の表に、光由の戒名、裏に藤兵衛の戒名が書かれていた。位牌の両面を注意して眺めると、ていねいにカンナをかけてあるのが光由のものであり、荒削りのほうが藤兵衛のものであった。

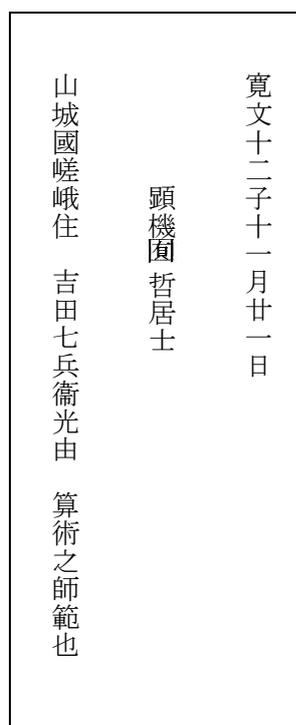
表には、「寛文十二子十一月廿一日 顕機園 哲居士 山城國嵯峨住吉田七兵衛光由算術之師範也」と戒名を中心に三行に分けて書いてあった。

よく見ると、七兵衛の「衛」の文字は、中央下部が「巾」ではなく「巾」になっている異体字だった。

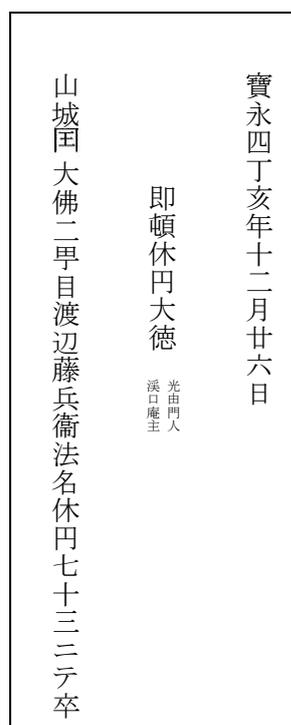
戒名の「園」は、はじめ「円」の旧字の「圓」かと思ったが、目をこらすと国構えのなかに、「有」とも「員」とも「貞」ともつかない字が書いてあった。「園（ゆう）」ならば、動物園、幼稚園、楽園の「園」を意味する。長谷は、位牌に刻まれた文字は、「圓」が正しいのであろうと思ったが、「園」のまま丁寧に写し取った。

裏を返すと、「寶永四丁亥年十二月廿六日 即頓休円大徳 山城^国大佛二早目渡辺藤兵衛
法名休円七十三ニテ卒」。これも三行。戒名の「即頓休円大徳」の下には「光由門人 溪口
庵主⁷」と二行ある。

(位牌の表)



(位牌の裏)



山城国の「国」は、「^国」になっていた。藤兵衛の「衛」も七兵衛と同じ「衛」。
二早目の「早」は、「町」の左右を、上下に分けて書いた異体字である。
渡辺藤兵衛の没年月日や戒名は、墓石に刻まれた通りだった。墓の「宝永四丁亥天」は、
位牌では「寶永四丁亥年」と「年」になっていた。
長谷は、旧字であれ、異体字であれ、ともかくも間違いのないように丁寧に写し取った。
表の光由と、裏の藤兵衛の日付にあらわれる「廿」の字は、どちらかと言えば片仮名の
「ホ」に似ていた。「寸」という字の右側に点を付けたような文字だった。
物差しをあてて大きさを測ると、位牌の幅は3・5センチ、長さは11・8センチ、厚
みは1・5ミリあった。(箱位牌の容器、つまり、足や装飾の付いた、一般に「位牌」と呼
ばれるものの総高は25センチであることも測定している)
位牌を調べ終わると、隈井家の祖・隈井市左エ門吉定の話が出た。その位牌も残ってい
るという。見ると、隈井吉定の引導師は、郡誌に光由の引導師として記されている両子寺
順慶法印だった。隈井吉定の位牌の裏にある戒名は、明治の排仏毀釈のおり、仏教から神
道になったとかで、もとの仏号を書きかえ、「——彦命」と神号にしている。

⁷ 長谷九郎の残したノートには「庵生」とある。平成26年8月の上垣渉の調査(写真撮影)は「庵主」。

長谷は、当主の吉孝と顔を見合わせて笑った。宗教に対して、こだわりがない家だな、と長谷は感じた。

長谷父子は、その夜、役場の前の宿に泊まった。(和田教授と最後まで行をともにしたのかは、記録に残っていない)

八月五日の現地調査は、こうして終わった。

翌八月六日。天台宗足曳山・両子寺(ふたごじ)に登る。

両子寺は、国東半島のちょうど中央に位置する主峰両子山(ふたごさん)にある。

その名の通り、子授けの寺として、江戸時代には、女人を中心に諸国から参詣者があつたとされる。(高野長英、大村益次郎らを育てた、江戸末期の教育者、広瀬淡窓が記している)

順慶法印の墓は、庫裏の裏にあった。高地の墓地の中央に、周囲の墓と比べて、ひときわ大きくそびえていた。目測では一丈数尺。一見して、この両子寺の開祖の墓のように思えた。

その夜は両子寺住職の寺田豪延から話を聞いた。寺の過去帳を見せてもらうと、順慶は両子寺中興四十七世となっているが、それ以前の住職の名は一切不明であった。1600年代にすでに四十七世と言えば、かなりの古刹である。奇妙なことに、順慶法印以前の墓の所在はまったく不明。筆跡、画像なども残っていなかった。

さらに八月七日。長谷は、国東が生んだ科学哲学者、三浦梅園の旧宅を訪問した。

梅園旧宅では、昼食をご馳走になった。

昼食を食べながら、三浦梅園の話になった(*追記2を参照)。「梅園」は号ではなく、塾の名前だという。祖父の三浦徹山が「天神の氏子たりとて梅鉢をつけけり(天神の氏子だから梅鉢を紋にした)」とのことであった。梅園自身には、「梅園」という署名のある著作はない。いつの頃からか、「梅園塾の三浦先生」が「三浦梅園」になったそうである。

三浦梅園と麻田剛立の交遊にも、話が及んだ。孤高の梅園を支えたのが剛立だった。梅園は剛立の父・綾部綱斎(けいさい)に学んでいる。

三浦家から光由の稽古庵まで三里。

三浦家から麻田剛立の祖父の綾部道弘宅まで一里ばかり。

同じ国東で同じ時代なのだから、相互に影響を及ぼしたに違いない。長谷は、食事を取りながら、久多羅木儀一郎の家で問いただしたことを、もう一度、思い出した。

三浦家の人々と、あいさつを交わした長谷は、息子の嘉臣とともに、夏の山道を歩き始めた。梅園の旧宅から、自宅がある大田村までは、歩いて帰れる距離である。

木陰を選ぶようにして、夏の日差しのもとを歩きながら、長谷は考えた。

二泊三日の調査行には、さまざまな謎が残った。

藤兵衛の墓のうしろの高いところに、これよりも大きい同じ形式の墓があって、まったく文字が刻まれていないのは、どうした理由であろうか。作為による無銘の墓碑は、どう解釈したらよいのか。

隈井家に、光由の位牌が、藤兵衛の位牌と表裏になっているのは、どうしたわけであろうか。

西国東郡誌の著者・佐藤蔵太郎は、何によって、書いたのだろうか。惜しいことではあるが、故人となった今、蔵書を見せてもらうことぐらいしかできない。

両子寺の順慶法印とは、いったいどういう人であったのだろうか。

光由や藤兵衛の学灯は、梅園や剛立に、受け継がれたのだろうか。

長谷の抱いた、もっとも大きな疑問は、大数学者であり、豪商角倉家の一族である、吉田光由の墓が、角倉家の墓所の京都嵯峨にあるのではないか、ということであった。

多くの謎が残った。

調査の成果は大きかったが、それ以上のさまざまな謎を残したまま、昭和二十八年八月五日から七日にかけての、長谷九郎の旅は終わった。

2. 論文

長谷は、実地調査の結果を、調査を始める前と同じように、関係方面に報告した。

和算史の研究者である平山諦と大矢真一からは、折り返し、返事が来た。

「あくる昭和二十九年の年内を期して、日本学士院から「明治前日本数学史」を出版する。ついで、吉田光由の墓の調査の顛末（てんまつ）記を書いて欲しい。」

二人は、長谷により詳しい調査報告書を求めた。

中央の、しかも気鋭の和算史研究者からの要求に、長谷は、勇んで研究メモを書き始めた。

平山諦と明治前日本数学史との関わりは、同書の末綱恕一の序文に詳しい。

「本明治前日本数学史全五冊は全稿、故学士院会員理学博士藤原松三郎の著作である。博士は本書の原稿完成後間もなく逝去されたため、原稿は補助嘱託理学博士平山諦君の手に移され、補訂を経て上梓せられたものである。」

藤原松三郎は、昭和二十年七月の空襲で、等身大ものノートを失ったが、原稿だけは守り通した。昭和二十一年十月、藤原松三郎の逝去ののち、平山諦は数千枚に及ぶ原稿を浄書し、かつ、補訂作業を行った。末綱恕一の序文の最後には、大矢真一がこの明治前日本数学史の刊行に献身的尽力をした、とも記されている。

和算研究史上、空前の大事業が平山諦、大矢真一の二人の手によって東京で進められていた。

その二人からの要求であった。

しかし——いったんは、研究メモを記しはじめた長谷であったが、筆は止まった。
それには、大きな理由がある。

長谷が、川北朝鄰の「本朝数学家小傳」の「写本」を手にした時期については、定かでない。

師範学校の時代に自ら書き写したかもしれないし、昭和二十八年の調査を終えたのち、小倉金之助や平山諦との文通のなかで入手したのかもしれない。あるいは、昭和三十年代に入ってからとも考えられる。

和算家・川北朝鄰の本朝数学家小伝は、大正三年八月に発行されている。(明治二十三年に著した「本邦算家小伝」を増補したのが「本朝数学家小伝」)

写本を読んだ長谷の目が、吉田光由の条に吸い寄せられたことは、想像に難(かた)くない。

それは、明治二十三年十二月の嵐山大悲閣千光寺住職・丸山戒岳の報告に基づくものだった。光由について、「寛文十二年壬子十一月二十一日 寿七十五 法名悠久菴顯機圓哲」と記されていた。

昭和二十八年八月五日、長谷自身が間違いなくその目で確かめた、夷の隈井家の位牌と同じ没年月日が記されていた。戒名(法名)も、悠久菴を除けば、「圓」と「園」の文字の違いはあっても、長谷の見た通りであった。

ただ、気鋭の和算研究者・平山諦は、この丸山戒岳の報告書の信頼度を疑っていた。

なぜ、平山諦は、丸山戒岳の、署名と二つの印判が付いている、報告書を疑ったのだろうか。

一つは、あまりにも詳しく吉田光由の事跡を記述していたからと考えられる。

「光由は、はじめ毛利勘兵衛重能(しげよし)に学び、のちには角倉素庵から汝思の書(算法統宗)を習った。数学の大衆化をするため、寛永四年に塵劫記を出版すると、洛陽の紙価を高め、海賊版も多く出た。ある時、肥後州の太守・細川忠利に招かれ、数学を教授した。不幸にして目を患い、太守が亡くなったあとは郷里に帰った。晩年は、角倉玄通(素庵の孫)に養われた。」

丸山戒岳は、下嵯峨村役場の由緒ある者から知識を得て、この報告書を書いたという。

和算家・川北朝鄰は、この報告書に基づいて、「本朝数学家小伝」をあらわした。いわば、伝聞、伝承をもとに、吉田光由の伝記を書いた。

明治時代の和算家が述べた伝承の内容に、平山諦、大矢真一、三上義夫などの和算史研究者には、にがいに経験がある。それは丸山戒岳の報告書にも登場する、毛利勘兵衛重能に関することからであるが、これは後回しにする。

明治二十三年に嵯峨の由緒ある者から得た知識として丸山戒岳が記した報告書。その報告書をもとに、和算家の川北朝鄰があらわした光由の伝記。内容が詳しければ詳しいほど、後世の作文と見られた。

もう一つ。これは勝手な想像である。

明治前日本数学史が平山諦の手で浄書・補訂が進められたことは、すでに述べた。同時に、平山諦は長谷九郎の報告の一部を聞いている。丸山戒岳の報告書の内容と、長谷の報告の内容とは、あまりにも見事に符合している。没年月日の一致。戒名の一致。細川家に招かれ、数学を教授したこと。四十九才の大分県の小学校の校長が、国東半島の山深く分け入って、調べた結果として伝えた内容を、そのとき、平山諦は疑ったのではないだろうか。

長谷は、沈黙せざるをえなかった。

すでに和算史の大家とも呼ばれていた平山諦と大矢真一の尽力によって、昭和二十九年十二月二十五日から順次、日本学士院の編纂として岩波書店から発行された、全五巻、総三千ページに及ぶ「明治前日本数学史」。

そこでは、長谷の調査と符合する丸山戒岳の報告書が疑問視されていた。信憑性を疑っていた。

むろん、長谷の調査には、一行も触れていない。

長谷は、実地調査から実に九年間の沈黙を守るのである。

ここで、毛利勘兵衛重能についての和算家の伝承なるものを、ご紹介しよう。

吉田光由の塵劫記などに端を発した和算は、明治時代になって、西洋数学の移入とともに、滅亡の道をたどった。ただ、そろばんの技術すなわち珠算だけが広く社会で生命を永らえた。江戸時代の伝統を引く、明治の和算家の多くは、珠算家となって、かろうじて生き延びることになったわけである。

そのころ、和算家・内田五観（いつみ）は、「和算の開祖・毛利勘兵衛重能は、二度、中国の明（みん）に渡っている」という、毛利重能・渡明説を唱えた。この説は、明治十一年の文部省発行の「文芸類纂」に収録された。和算家から洋算家となった遠藤利貞が「大日本数学史」に渡明説をそのまま紹介したため、こののち長く、毛利重能は明に渡った、と世に伝えられた。

内田は、紅葉山文庫の写本で見たと述べた。ただ、その写本の名前や著者は、よく覚えていなかった。多くの研究者が紅葉山文庫はもちろん、数々の古文書を探したが、毛利重能・渡明説は、明治十一年の文芸類纂より以前の文献には、なかった。（後年、白石長忠（1795～1862）の「数家人名誌」（1824）に渡明説があることが発見されたが、根拠は不明）

平山諦らが、和算家・川北朝鄰の本朝数学家小伝（大正三年）に疑問を抱いたのは、このような経験があるからである。

長谷九郎の時代までには、毛利重能について、真か偽か、いずれとも判定のつかない、論争も数多くあった。

まず、明治二十三年十二月六日付けの丸山戒岳の報告書。吉田光由は、はじめ、毛利重

能に教えを受けたという。平山諦すなわち明治前日本数学史が、これを疑っているのは、先に述べた通りである。

明治の終わり頃には、吉田光由の塵劫記がもっとも古い算書なのか、あるいは他に古い本があるのか、という議論があった。主役は、川北朝鄰と遠藤利貞である。川北朝鄰は、塵劫記が最古の和算書であることを主張した。一方、遠藤利貞は、毛利重能の歸除濫觴（きじょ・らんしょう）こそが最古の本であると主張した。両説のどちらが正しいか。この議論は、同じ明治の終わりに毛利重能の割算書（わりざんしょ）が水戸で発見されたことで決着した。こののち、歸除濫觴は発見されなかったが、割算書は日本国内の各地で数冊が発見された。（すべて表紙はない）

塵劫記は、寛永四年（1627）。

割算書は、元和八年（1622）。

割算書のほうが古い。割算書は、昭和二年に、歌人の与謝野晶子・鉄幹夫妻の手で、日本古典全集刊行会「古代数学集」のなかに復刻され、広く読まれるようになった⁸。

元和八年刊行の割算書は、次のような書き出しで始まる。

「そもそも割り算は、ユダヤ（寿天屋）のベツレヘム（辺連）で、人類の夫婦の初めの二人が、智恵万徳を備えた木の、たとえようもない甘い果物を二つに割ったことに始まる。」

この序文は、旧約聖書のアダムとイブの物語を連想させる。天上の樂園の地が、キリスト生誕の地、ベツレヘムに置きかわっているが。

大正から昭和の初めにかけて、おりからの南蛮ブームに、何人かの研究者や好事家が、この序文に飛びついた。割算書の著者・毛利勘兵衛重能は、キリシタンではないか、と。

珠算界の若き雄、安部元章は、「珠算の研究」昭和十四年四月号に、「切支丹宗とソロバン」という一文を掲載した。ただそれは、毛利重能はキリシタンであったかもしれない、という推測の域を出ない、随筆に近いものだった。実証的な根拠に基づくものではなかった。（長谷は「切支丹宗とソロバン」を読んでいる。長谷が残した研究ノートに題名が書いてある。ただし読んだ時期は、戦後のことであろう）

実地調査の夏の日から、二年の歳月が流れる。

昭和三十年、長谷は、大田村の大田中学の校長になった。

その翌年の昭和三十一年、和算史の研究のうえで、のちに大きな意味を持つ出版が行われた。明治前日本数学史に心血を注いだ平山諦の「東西数学物語」が、恒星社から発行されたのである。

平山諦は、この本のなかで、和算の問題の「香木を切り分ける事」「油分け算」「盗人隠し」「裁ち合わせの問題」の四つは、どうしても西洋の影響があるとしか考えられない、と指摘した。

東西数学物語は、わが国で、はじめての本格的な比較数学史の試みであった。なぜ江戸

⁸ このとき、書名が不明であったので、かりに「割算書」と命名された。

初期に、ヨーロッパの数学の問題（パズルに近い問題）が日本に伝来しているのか。吉田光由らの数学者に、誰がどのようにして伝えたのか。

それは平山諦自身が、自らに課した、解決すべき課題であった。

昭和三十二年三月、長谷は、大田中学校・校長を最後に退職の日を迎えた。当時は、定年前に退職するのが慣例となっていた。

第二の人生をどのように歩むかを思案した長谷は、かつての珠算教育に捧げた若き日を思い出し、大分県珠算教育連盟に加入する。全国珠算教育連盟には、和算の歴史に取り組む人々もいた。吉田光由の墓所を突き止めるには、好都合であった。

以来、長谷は、全国珠算教育連盟を足場として、光由の墓を探し求めた。

三重村・夷の無銘墓は、吉田光由の墓と断定できるのだろうか。

光由の墓は、実際にどこかにあるのではないか。

光由の墓、いずこ。

むろん夷には何度も足を運ぶ。——ずっと先の話になるが、実地調査から二十年後の、昭和四十八年十月十二日にも、長谷は無銘墓と藤兵衛墓の両方を再度測定しているほどである。

長谷は、角倉家一族の墓所のある京都嵯峨の二尊院や、嵐山の大悲閣も訪問している。

二尊院には、角倉了以夫妻の墓を中心に、角倉家の百基以上もの墓石が林立していた。了以夫妻の墓は、禅宗の開祖クラスだけが建てる、堂々とした宝珠形の無縫塔（無陵塔）であった。その横に、素庵夫妻の墓記碑（供養墓）が並んでいた。

大悲閣は、角倉家の開削した大堰（おおい）川の清流を見下ろしていた。鍬（くわ）を手にした精悍な了以の木像が安置されていた。了以は、工事の殉難者を弔うために、大悲閣を建立したという。

化野（あだしの）念仏寺まで足を伸ばすと、角倉素庵の本墓があった（*追記2を参照）。中世以来の無常の地、念仏寺に、名前だけを刻んだ素庵の本墓は、ひっそりとたたずんでいた。

たずね歩いた長谷であったが、高名な塵劫記の著者・吉田光由の、墓の所在を知る人は、誰もいなかった。

長谷九郎が、重い腰を上げて、雑誌「珠算界」に、論文「塵劫記の著者 吉田光由の墓発見される」を発表したのは、調査から九年後の、昭和三十七年のことである。

印刷の都合で、長谷が夷で採録した文字は、すべて当用漢字に置き換えられた。

このとき長谷は、平山諦に質問をしている。「吉田光由の墓はどこにあるのですか」「夷の無銘墓は光由の墓でしょうか」「吉田光由の戒名や渡辺藤兵衛の戒名は、ほんとうのものと断定できるのでしょうか」。平山諦は、答えることができなかった。

この論文への反応は、戦後の大学で数学を教える研究者からは誰からも寄せられなかつ

た。江戸時代の和算書を数学的に解明しようとした、数学史の研究者には、墓や位牌のことなど、どうでもよかったのかもしれない。長谷の論文は、地方の郷土史家のものとして一笑に付された。

はなはだしいのは、「そろばん塾の先生が書いたものですからね」との声も、長谷の耳に入った。長谷は、県の珠算教育連盟に加入したとき、師範学校の同窓生や、先輩の塾経営者から、珠算塾の開設を勧められたが、「珠算教育に携わる人々を教育したい」と述べて、自らは珠算塾を開設していない。

この年、昭和三十七年に、師と仰いでいた小倉金之助が七十七才で亡くなったことを、長谷は新聞で知った（*追記2を参照）。

文部省が四つ玉そろばんの採用を決定した翌年の昭和十五年三月、岩波新書「日本の数学」で、長谷に、和算史への興味をかきたてた小倉金之助。

小倉金之助は、和算の歴史を取り上げ、江戸時代の社会構造から、和算滅亡の理由を述べた。家元制度に代表される日本的芸道の精神が和算を滅ぼした、と主張した。

小倉金之助は、和算を江戸時代の社会という大きな器のなかで見た。日本の精神や思想と言われるものを、和算を手段として、明らかにした。

吉田光由と三浦梅園のつながりを探し求めていた長谷には、小倉金之助の「時代背景を見よ」「精神の系譜をたどれ」という思いが、遺言のように感じられた。

長谷は、その後も、吉田光由の墓の真相を追求し続けた。

のちに全国珠算教育連盟本部参与および大分県支部顧問となった、藤内啓二も、長谷の協力者となった。（藤内啓二は、全珠連会報第120号に、長谷との探索行の思い出を綴っている）

更に、十年が経過する。

昭和四十年代になって、下平和夫らによって「荒木先生茶談」などの文書の研究が進み、毛利勘兵衛重能の門下生の名前が明らかになってきた。毛利重能は和算の開祖である、との判断が下された。

昭和四十七年、割算書刊行三百五十年を記念して、日本数学史学会、全国珠算教育連盟、日本珠算連盟の三者は、西宮市瓦林町のすぐ東の熊野神社に、毛利重能顕彰碑「割算天下 一重能」を建立した。

「毛利勘兵衛重能は瓦林の住人である。のちに京都に移り、吉田光由、今村知商、高原吉種など多くの弟子を養成した。当時の数学を集大成し、元和八年割算書を著してそろばんの除法、金銀、売買、両替、無尽、利率、面積、体積、比例などの日常の算法を広め、わが国数学の道を開いた。今年に割算書刊行三百五十年に当る。全国有志の協力を得、これを記念し巻末の文字を右に刻み、毛利重能顕彰の碑とする。 昭和四十七年十月十日 理学博士 平山諦 撰文」

長谷は、珠算教育連盟の一員として、この事業に参画した。

先に述べたように、毛利重能はキリシタンではないか、という疑問の声もあった。その意見を押し切ったの、神社内の顕彰碑だった。(三団体が熊野神社と取り交わした契約書には、「碑が信仰の対象に移行しても(三団体は)異議なくこれを認めること」とある)

顕彰碑が建立されると、賽銭(さいせん)を献上する参拝者があいついだ。そのため、翌昭和四十八年八月八日、同じ熊野神社内に、算学神社が建立された。ご神体は、毛利重能の命(みこと)。十月には、そろばんの老舗、雲州堂が鳥居を奉納した。算学神社の祭日は、パチパチという音に由来する、そろばんの日、八月八日となった。

転機は、この昭和四十八年秋に訪れる。

熊野神社の算学神社に、鳥居が奉納された、ちょうどその頃――。

長谷は、それまで調べ、書きためた「吉田光由の研究」と題するノートを、全国珠算教育連盟京都本部の荒木勲に見せ、京都での調査を依頼した。昭和四十一年に、角倉同族会が結成され、林屋辰三郎などの歴史学者の協力を得て、会報「すみのくら」が発行されていることを知ったからである。同族会の会長は、古く吉田栄可の流れを引く角倉平治であった。

荒木勲は、昭和四十八年十月二十五日、角倉平治に会った。

荒木勲は角倉平治に、長谷の研究ノートに記された、大悲閣千光寺住職・丸山戒岳の報告書を見せた。すると、当主の角倉平治が、おもむろに取り出したのは、「角倉源流系図稿」と大書した古文書であった。

当主は、古文書の吉田光由の項を開き、荒木勲に差し出した。荒木勲は、見入った。

そこには、丸山戒岳の報告書と、一言一句とも違わぬ文字が記されていた。

丸山戒岳は、この角倉源流系図稿を見て、報告書を川北朝鄰に書いたのであった。

荒木勲は、この事実を、次の日に長谷宛の手紙にしたためている。

「長谷九郎先生 現在多忙な事務に追われているため要点を報告申し上げます。

一、角倉家の直流の人、角倉平治氏に逢う。10/25(十月二十五日)

二、平治氏宅に角倉源流系図稿あり。

三、系図は寛永の頃より誌され、安永に至るもの。

四、系図によれば先生から拝借のノートP4の宗忠の子、宗桂・与左衛門・六郎左衛門は、与左衛門・宗桂・六郎左衛門(の順)となっており、子孫はそれぞれ正しくなっています。

五、光由の後記には、丸山戒岳師の文はノートそのままであり、その後、重能(しげよし)者(は)、元池田三左衛門尉(池田輝政)封国之郡吏也、云々の文が続いています。この文は日本珠算連盟復刻の割算書P64に掲げてあるとおりです。(日本珠算連盟は、丸山戒岳の報告書に基づいて、昭和三十一年に割算書を復刻している)

六、墓の件は不明ですが、眼疾のため帰京したことは戒岳の報告通り系図にも記されてありました。

七、以上のことから夷の墓の真実性は薄れるように考えられます。(カッコ内は鳥野が補った)

以上、中間報告まで。数日後には墓探しに平治氏と同行する予定です。」

荒木勲は、晩年の光由が京都に帰っているの、墓は国東の夷にあるはずがない、と結論した。墓は亡くなった場所に建てられるものと考えていた。

「以上のことから夷の墓の真実性は薄れるように考えられます」。この文言は、長谷の胸に冷たく突き刺さった。

ただ、それ以上に大きな収穫があった。長谷が調べあげた、丸山戒岳の報告書が、角倉家に残る古文書で実証されたのである。

長谷は、この手紙を十月二十九日に受け取っていることが、分かる。

長谷は、自らの研究ノートに書き込んでいる。手稿「吉田光由の研究」の4ページ、丸山戒岳の報告書の上に、ごく小さく「角倉源流系図⁹によって立証さる S 4 8 ・ 1 0 ・ 2 9」の文字がある。

人は大いなる普遍性を前にしたとき、人は真実をまのあたりにしたとき、小さな声でしか、つぶやくことはない。発見の喜びを、誰よりも先に、自分自身に伝えるためである。

長谷が記した「立証さる」の小さな文字は、長谷の大きな感動を伝えている。

荒木勲は、角倉源流系図稿を当主・角倉平治の許可を得て複写し、和算研究の第一人者、平山諦に渡した。

長谷九郎の足跡をたどる物語は間もなく終わる。

大団円を語るまえに、しばらく私見を述べておきたい。私（島野）は、長谷九郎氏は、荒木勲氏が複写した「角倉源流系図稿」をご覧になっていない、と思っている。

これは長谷氏の研究が未完成なものだと主張するものではない。むしろ長谷氏ご自身も気付かれなかった重要な事実が「角倉源流系図稿」にあることを、世に知らせるためである。

系図稿の吉田光由の項の原文を掲げる。「七兵衛 諱光由若名与七入道号久菴 寛文十二年壬子十一月廿一日死 寿七十五 法名悠久菴顯機園哲 妻灰屋与兵衛女後号妙哲」。

この文は「七兵衛、諱（いみな）は光由。若名（じゃくめい）を与七。入道して久菴（きゅうあん）と号す。寛文十二年壬子（じんし、又は、みずのえ・ね）十一月廿一日死す。寿七十五。法名は悠久菴顯機園哲。妻は灰屋与兵衛の女（むすめ）、後に妙哲と号す」と読むのであろう。

読者は、法名の部分の文字に注目されたい。顯機園哲の「園」は、長谷九郎氏が、夷の隈井吉孝氏の家で確認された文字と同じである。

私は、荒木勲氏がコピーされた角倉源流系図稿の、この文字の部分を何度も見た。

丸山戒岳師の報告書にあるように、「園」とも読めないことはないが、私には、夷の光由の位牌の文字「園」に読めた。

「園」は、物語のなかで述べたように、「園」でも「園」でもない。

系図稿は、延宝九年（1681）に、吉田光由の子・田中光玄（みつはる）が父・光由

⁹ 長谷九郎の原文のまま。正しくは「角倉源流系図稿」。

の略伝を記し、貞享（じょうきょう）四年（1687）に、その他の一族の系図をまとめて、角倉源流系図稿として同じ田中光玄が誌したものである。（光由の子供の代から、田中姓に改めていることも、ここで注意しておきたい）

角倉家に残るのは、安永三年（1774）の角倉傳治による写本である。この写本を荒木勲氏は複写された。

角倉家や、渡辺藤兵衛に代表される角倉家の周辺の人々には、吉田光由の戒名・顕機園哲に、「園」を用いる伝統があったのではないだろうか。

物語は、昭和の時代にもどる。

昭和五十二年秋、吉田光由の塵劫記刊行三百五十年を機に、毛利重能の顕彰碑と同じように、日本数学史学会、全国珠算教育連盟、日本珠算連盟の三団体は、「塵劫記」の復刻と、光由の顕彰碑の建立を行なった。

光由の顕彰碑は、「塵劫記」と刻まれ、角倉家の墓所・嵯峨二尊院のすぐそばの、常寂光寺の敷地内に建てられた。

長谷九郎は、やはり毛利重能の顕彰碑のときと同じように、この建立に尽力した。

長谷は、荒木勲とともに全国珠算教育連盟を代表し、除幕式のひもを引いた。長谷は、この頃、全国珠算教育連盟の顧問に就任していた。

長谷を先頭に、光由の墓を探し出す努力は、この「塵劫記」の碑によって、一応の終焉をみたと言ってもよいであろう。

吉田光由の墓と伝えられるものは、長谷が発見した、あの夷の無銘墓をのぞいて、どこにもなかった。全国の珠算人が、高名な歴史学者が、さまざまな和算研究者が、角倉家の一族全員が、文字通り草の根をかきわけ、古文書をさぐり、伝承を探しても、光由の墓は、あの夷の無銘墓しかなかった。

昭和五十三年、長谷は、山口県で開かれた全国珠算教育連盟の総会で特別表彰を受けた。昭和二十八年の光由の墓の発見以来、二十五年目の夏のことであった。

その特別表彰の夜、宿泊先で、長谷は倒れた。

教育と吉田光由の研究に生きた長谷九郎が、七十四年の生涯を終えたのは、昭和五十三年八月十二日のことである。

昭和二十八年の夏の日、長谷九郎が向かい合った、無銘の吉田光由の墓。

なぜ、和算初期の大数学者の墓が無銘なのか。

この大きな謎の解決の糸口を見つけたのは、齢八十才になろうとする平山諦である。

平山諦は、平成の時代になって、「イエズス会の宣教師、カルロ・スピノラは、慶長九年から十六年までの七年間、京都にいた。その間に天主堂にアカデミアを設け、数学を教えた。割算書の毛利重能、幼い吉田光由の師となった角倉素庵、諸勘分物の百川治兵衛らは、このアカデミアに集まり、スピノラの教えを受けたに違いない」という仮説を発表した。

この平山仮説またはスピノラ仮説と呼ばれる理論は、明治前日本数学史の補訂作業をおこない、ついで東西数学物語をあらわした、平山諦自身の疑問への解答でもあった。

平山諦は、いくつもの数学的な根拠をあげて、みずからのスピノラ仮説を補強した。

平成三年三月の「珠算界」で、平山諦は、述べている。

「吉田光由の墓について論じた論文は次の一編だけである。

珠算界（121号 1962年6月）に

長谷九郎、吉田光由の墓発見される

が発表された時、私は同氏から質問されたが、なんら答えることが出来なかった。

今から十五年ばかり前に、

荒木勲コピーする所の角倉源流系図稿

を得て、長谷九郎の論文の一部分が解明された。その後、

宮崎賢太郎訳著、カルロ・スピノラ伝、昭和六十年

林屋辰三郎著、角倉素庵、昭和五十三年

を読むに及んで、長谷九郎の論文が大切であることが判明した。」

素庵の本墓が一族の墓所である嵯峨二尊院に建立されなかったことには、理由があった。

光由が、はるか辺境の地、国東の夷に赴いたことにも、理由があった。

渡辺藤兵衛が、師を追って夷を訪れ、永住の地としたことにも、理由があった。

光由の墓が、京都に建てられなかったことにも、理由があった。

村人が、光由と藤兵衛の戒名を位牌の表裏に記し、礼拝したことにも、理由があった。

藤兵衛は、師の光由の墓に、証拠を残す文字を刻むことはできなかった。

禁制下のキリシタンであるがゆえに、夷の墓は、無銘でなければならなかったのである。

平山諦の論考は、平成五年に恒星社厚生閣から「和算の誕生」として発刊をみた。

その巻頭には、西暦1622年（元和八年）9月10日、長崎西坂で殉教したイエズス会の宣教師、カルロ・スピノラの、火刑の模様を刻んだ銅版画が掲げられている。 ●

〔追記1〕

「華自紅一和算とキリシタン」の序説はこれで終わる。

私は、長谷九郎氏の調査と研究は、平山博士が述べておられる以上に、どのような形容詞を付けても形容しきれないほど、大切なものであったと思う。

その意味は、1996年11月に島原で開かれた「全国かくれキリシタン研究大会」に参加された方には、よくご理解いただけるであろう。すなわち、長谷九郎氏が採録された位牌の文字などは、まぎれもない「キリシタン文字」であるからである。

なお、位牌は、隈井吉孝氏の判断で、現在は、香々地町中央公民館に寄託されている。

この長い序説の執筆にご協力いただいた方々のご芳名を掲げる（五十音順）。

安藤洋美、大塚泰女、岡本哲男、川瀬潔、武本幹雄、田中延佳、田村三郎、永松祥一郎、長谷文子、長谷嘉臣、浜崎献作、藤井豊、前中和子、三角寛市、宮崎賢太郎、宮本良雄、安井朗、山田悦郎、の各氏からはご指導と激励をいただいた。

とくに奥様長谷文子さんからは、電話とお手紙で、長谷九郎氏のご経歴をお教えいただいた。深く感謝する。

〔追記2〕

この文章を書いた目的は二つある。一つは、長谷氏の手稿を詳しく紹介することにある。「珠算界」の長谷論文には、長谷氏が採録された文字が、印刷の都合で、そのまま掲載されていない。いま一つは、スピノラ仮説が生まれるまでの経緯を、世に伝えたかったからである。

文中にも注記したが、以下の五点は、私の想像に基づいている。

- 1) 実地調査以前に、長谷氏が三重村役場に問い合わせた
- 2) 師範学校時代に、梅園全集を長谷氏が愛読していた
- 3) 梅園旧宅で、三浦家の人々と三浦梅園の話をした
- 4) 京都での調査で、化野念仏寺まで長谷氏が足をのばした
- 5) 昭和37年、小倉金之助氏の死去を長谷氏が新聞で知った

以上は、私の創作である。これ以外は、実際の出来事である。ここに明記しておく。

登場する人名は、すべて実名である。敬称は略した。

文中の「園」は私が独自に作成した文字であることもお断りしておく。

〔追記3〕

私にとって、長谷氏の手稿は、光由と梅園、剛立との関連についての貴重な示唆となった。とくに三浦徹山は、長谷氏が発見された「先考（＝なきちち）三浦虎角居士行状（宝暦10年、梅園三十八才の作）」（大正元年・梅園全集所載）から「キリシタンと断定できる」と思っている。

「序説 ある和算研究者の足跡」を読まれた読者は、長谷氏の業績を、四つ玉そろばんと昭和二十八年の実地調査だけに思われたかもしれない。それは語り手である私の筆の弱さによる。

長谷九郎氏は、数学とくに数学教育の分野で、独創に生きた研究者である。

戦前の長谷氏が文部大臣に建議されたうち、特筆しなければならないのは、教科名の変更である。長谷氏は、「算術」から「算数」への変更を建議された。今日の小学校の「算数」が、若き長谷氏の提案から生まれたことは、教育史に明記されるべき事実である。（「算数」という語句は、晋書律曆志に見える）

また、長谷九郎氏は、明治前日本数学史が発刊された、昭和二十九年十二月のまさにそ

の月、雑誌「自然」に「望ましい掛け算と割り算の仕方」という論文を発表されている。短いものではあるが、独力で進められた、計算法改善の集大成ともいふべき、真に独創的な論文である。

小倉博士は、この長谷氏の論文を高く評価された。その趣旨は、翌昭和三十年一月号の、雑誌「改造」に、長谷氏との協同研究として紹介された「日本数学史上の奇蹟—柳河春三の掛け算—」に詳しい。小倉博士は、幕末の人・柳河春三の計算法を「奇蹟」と呼ばれた。この論文の最後は次のように結ばれている。「先駆者柳河春三は、百年の後、長谷さんのような知己をえたことを悦びとしなければならない」。

小倉論文は、続く昭和三十一年、新樹社の「近代日本の数学」の第一章を飾った。この「近代日本の数学」は毎日出版文化賞に輝いている。現在は、勁草書房の小倉金之助著作集・第二巻に収められている。解説の大矢真一氏も「長谷にはこの計算形式に関する論文以外にも独創的なものが多い」と高く評価されている。

小倉金之助博士は、「カジヨリ初等数学史」によって、若き長谷氏に計算法の改善への扉を開いた恩師であり、昭和三十年、協同研究者として長谷氏を世に紹介した恩師であり、岩波新書の「日本の数学」で長谷氏に和算史の分野を啓発した恩師であった、と私は思う。

（「算盤と十字架・序説」改題）

ある和算研究者の足跡 執筆ノート（珠算大阪第5号 平成11年）

全国珠算教育連盟・元顧問の長谷九郎氏のことを書こうと思ったのは、島原半島のホテルでの対話がはじまりだった。その日は、ホテルの大会場で「全国かくれキリシタン研究大会」の発表がつづいていた。私は、聞きたい講演を三つだけ聞くことにし、ほかの時間は喫茶室でコーヒーを飲んでいた。十ほどもあった発表のうち、大半をサボっていたわけだが、人けの少ない喫茶室に、もう一人、同じようにサボっている人がいた。そこで、どちらからともなく、キリシタンのことを話し合うことになった。名刺を交わすと、「歯科医師・浜崎献作」とあった。

和算を調べている、と私が言うと、浜崎氏は、最近、島原半島でソロバンを抱いたエビス像があいついで見つまっていることを教えてくれた。ソロバンとキリシタンは何か関係があるのではないかと、という意見だった。たしか、昭和十四年に安部元章という人が「切支丹宗とソロバン」という文章を書いていますよ、と言うと、ぜひ見せてくれとのこと。

大阪に帰って、「切支丹宗とソロバン」のコピーをとり、ふと考えた。これだけでは愛想

がない。自分の文章も書いて送ることにしよう。確実に読んでくれる読者が保証されると、書く気が起こるものである。浜崎氏はエビス像の話を書かれた。エビスといえば、国東半島に夷という地名がある。塵劫記の著者・吉田光由のものと伝えられる無銘墓があり、昭和二十八年に長谷九郎氏が調査されている。ひとつ長谷九郎氏のことを書いてみよう。

いま思えば自信過剰もよいところだが、まったく資料が手元になかったわけではない。まず、長谷氏が残された「手稿」を半年ほど前に手に入れていた。

平山諦先生の『和算の誕生』（恒星社厚生閣）が、長谷氏の論文を紹介しているのはご承知の通りである。この長谷氏の論文自体も、すでに読んでいた。

ただ、長谷九郎氏の経歴がわかっていなかった。どんな人生を歩まれたのか、まったく知らなかった。全国珠算教育連盟の顧問をされたことも、そのときは知らなかった。わからないことは知っている人に聞けばよい、というのが、これまでの経験から明らか。私は、ご遺族を探すことにした。

ご出身地と小学校の校長先生だったことは知っていたので、電話番号案内で、「大分県西国東郡大田村・教育委員会」を調べた。さっそく電話をかけると、うまいぐあいに「長谷九郎先生の家電話番号」を知っている人がいて、ていねいに教えてくれた。臆面もなく、その番号に電話した。女性の声がかえってきた。

このご婦人こそが、亡き長谷九郎氏の奥様、長谷文子さんだった。

文子さん（ほんとうは文子刀自（とじ）というべきだろうが…）からは、長谷氏が「四つ玉ソロバン」の功績者であることなどをうかがった。昭和十四年、文部省が小学校の計算器具に「四つ玉ソロバン」の採用を決めたのは、若き長谷氏が大分からはるばる東京まで足を運んで建議されたからである。同じころ教科名が「算術」から「算数」に変わったのも、長谷氏のおかげである。

さて、ここからが、われながら大胆というか不敵というか、なにはともあれ、第一稿を書いてみた。ぜんぶで原稿用紙 70 枚ぐらい。ほんの 10 分ほどの文子夫人への電話取材で、長谷九郎氏の経歴をもり込んで、小説らしきものを書きあげた。

前半は、長谷氏の手稿にもとづいて、吉田光由のものと伝えられる国東・夷の無銘墓の、実地調査のようすを再現してみた。後半は、ちょっと語弊があるかもしれないが、平山諦先生と長谷氏との確執を主題にした。

話のついでに、確執について、ひとこと。

映画や演劇のセオリーの一つに、「ストラグル（闘争・確執・対立）を描け」というのがある。人間を描写するには、人間関係を描け、という理論。

いわゆる「葛藤」のほか、人間社会には、さまざまな「確執」がある。

歴史にもストラグルがある。キリシタン信仰との関連では、ひとくちに「キリスト教」といっても新教と旧教の対立がある（イエズス会の幹部であるヴァリニャーノは、一向宗の教えはルター派の説と同じだ、と力説している）。旧教つまりカトリック内部にも、イエズス会やフランシスコ会などの修道会どうしの対立がある。さらにはイエズス会内部にも

神父どうしの抗争があるし、外国人宣教師と日本人信徒との争いもある。日本人信徒どうしの対立もあった。

はやい話が、「こう考えるのがいちばん良い」「こうするのがいちばん良い」と誰かが言ったとしたら、反対意見がかならず存在する。一方と他方の、両方を描け、というのが「ストラグル」の理論。

このような経験則にもとづいて、「ある和算研究者の足跡」第一稿ができた。浜崎氏と出会って一週間ほどで書いた原稿は、浜崎氏、文子夫人をはじめ、あわせて五人にお送りした。

この時点では「読者」を長谷文子さんに想定していたように思う。このあと、事態は、予想以上に進んだ。

はじめの五人のうち、和算の研究者から、「この原稿は面白いので、〇〇先生にもお見せしたらよい」と勧められた。〇〇先生に送ると、××先生を紹介された。

もちろん、ここの文章はおかしい、というご指摘も受けた。

そのつど、訂正した原稿を関係各位にお送りした。かくて五人が十人になり、十人が二十人ぐらいになった。読者が増えたわけである。なかには、お送りした覚えがないのに、どこで入手されたのか、「感動した」とわざわざ電話をくださる方もいた。

第一稿から数えて一年半、第十稿ぐらいまで訂正しただろうか（じつは、まだ誤字や脱字があり、いまでも訂正したいと思っている）、平成十年にいたって、この「ある和算研究者の足跡」を序説にすえて、近畿和算ゼミナールで発表したレジュメ類を簡易製本することにした。書名は、国東が生んだ哲学者、三浦梅園の言葉からとった。

「人生恨（うら）むなかれ、人の識（し）るなきを。幽谷深山、華（はな）自（おのず）から紅（くれない）なり」。

ここから書名を「華自紅」にした。

ざっと見つもって、和算の研究者が全国に百人、キリシタンの研究者が同じく百人。「華自紅」は二百部つくった。

このぐらいの方々に読んでいただけたら十分、と考えた。そのなかで、私がいちばん読んでもらいたかった方のお手紙を最後にご紹介する。

「華自紅有難う。八十八才を記念して書いた『和算の誕生』は説明不十分でした。六年たって漸く人の目を引くようになりました」。

平山諦先生は、平成十年六月二十二日、九十三歳で亡くなられた。そのひと月前のお手紙だった。

長谷九郎氏もそうだが、学問の世界で、生涯をつうじて前向きな姿勢をつらぬかれた平山先生は、ほんとうに偉い人だな、とつくづく感じる。